
ウズベキスタンにおけるバスマチ運動 の見直しとその課題

The Problems of Re-examination of the Basmachi Movement in Uzbekistan

帯谷 知可*

OBRYA Chika

キーワード：中央アジア近現代史, バスマチ運動, ウズベキスタン, 歴史の見直し, 民族と国家

KEY WORDS: Modern history of Central Asia, Basmachi movement, Uzbekistan,
Re-examination of history, Nation and state

After the collapse of the Soviet Union, the re-examination of the history, which had begun in the period of the perestroika and glasnost' policy with very natural desire to know the true facts of their history, has had a tendency to overestimate the 'national' factor in some Newly Independent States.

In the case of Uzbekistan, such a tendency is observed typically in the rehabilitation and re-evaluation of Timur. Timur, who had been a brutal conqueror in Soviet historiography, became a brave warrior, merciful educator and wise governor—a new national hero. Proper mention is scarcely made of the national or ethnic background of Timur and the origin of the formation of Uzbek people.

Similarly, the definition of the Basmachi movement changed dramatically from “an anti-revolutionary reactionary nationalistic movement” to “a national liberation movement” and now it is called ‘Istiqlolçilik harakati’ (a movement for independence). Here again historians tend intentionally to equate the aims of the movement with the existence of independent Uzbekistan, without paying careful attention to the differences between that time and today in the concept of the ‘nation’.

The author does not intend to take an approach to the movement from the specific viewpoint of the national liberation movement. The Basmachi movement was the epitome of the inconsistency and chaos of revolutionary Central Asia. Through the examination of the movement we can find interesting phases of Central Asian society, among which the author considers the two following points to be the most important: to put a new construction on Central Asian modern history for the period of the revolution; to reveal the heterogeneity of the supposedly homogeneous Central Asian society, which may provide a useful perspective for Central Asian area studies.

* 地域研究企画交流センター助手 Assistant Professor, JCAS

はじめに

バスマチ運動*1と総称される、ロシア革命波及後の中央アジアに生じたムスリム住民を中心とする反ソヴェト武力抵抗運動は、ソ連史学においてはもっぱら帝国主義諸国に教唆されたブルジョワ民族主義的反革命運動という画一的な負の評価しか認められず、一方いわゆる西側の歴史家たちの一部はこれをソヴェト政権によって抑圧されてしまった民族運動ととらえ、ソ連の帝國的支配体制を批判する材料ともする傾向が強く、その見解の対立は冷戦構造を如実に反映したものであった。

ゴルバチョフ指導下に始まったペレストロイカの影響と、各共和国の独立宣言、それに続くソ連崩壊という流れの中で、旧ソ連諸国ではいわゆる歴史の見直しがさかんに行われるようになった。中央アジアもその例外ではない。従来のロシア革命を絶対的正義とする歴史的価値観はまったく逆転し、現在の独立国家としての存在と民族の正当性を是とする立場から、ソ連体制をロシア帝国による中央アジア征服以来のロシアとロシア人による「支配」の継続と捉える、またさらに社会主義体制の悪弊を告発するという傾向が強い。その中で、バスマチ運動は反ソヴェトを旗印とした地元住民による抵抗を核とする運動であっただけに、

ペレストロイカが始まって間もなくから見直しの兆候が現れた。バスマチ運動の主要な舞台となった地域が存在する現在のウズベキスタン共和国では、バスマチ運動研究は近現代史の見直しにおいて中心的テーマのひとつといっても過言でない地位を占めているが、それは同時に近現代史上の現象を見直す際の極めてデリケートな問題をも露呈している。

本稿ではウズベキスタンの歴史の見直しの現状を紹介しつつ、そのような問題点を検討し、その上で今後の筆者としてのバスマチ運動研究の方向を示すことを目的とする。それはまた、筆者にとって地域研究としての中央アジア研究を模索するヒントともなるであろうことを期待する。

I. ウズベキスタンにおける歴史の見直しの展開

1. 歴史の見直しの基本的問題点

ウズベキスタンにおいても1980年代末から、作家・詩人・研究者といった知識人層によって、それまでのソ連史学において語られなかった、あるいは語ることを許されなかった史実の発掘と発表がさかんになり、歴史上の人物や事件に対する従来とは異なった評価・見解が提示されるようになった。これらは社会に自由化の兆しが現れたことに伴って、かつての事実の隠匿や歪曲、不

* 1 一般に、ウズベク語では *Bosmaçilari harakati* または *Bosmaçilik*、ロシア語では *Basmacheskoe dvizhenie* または *Basmachestvo* といわれる。

なお、現代ウズベク語のローマ字表記については現在ウズベキスタン共和国で採用されている方式に従い、日本語でカタカナ表記する場合は原則として、o (キリル文字表記ウズベク語の o) を「ア」、ö (キリル文字表記ウズベク語の y) を「ウ」と表記することにする。例えば、「ウズベキスタン」は *Özbekiston* (*Ўзбекистон*) となる。また、引用文献の著者名は、ウズベク人であってもロシア語でその文献が書かれており、その他に引用がない場合は氏名のロシア語表記をロシア語の転写法に従って表記した。例えば「ホジャエフ」はウズベク語表記からの転写では *Hasanov* (*Ҳасанов*)、ロシア語表記からの転写では *Khasanov* (*Хасанов*) となる。

当な評価、様々な人々に対する故なき逮捕・投獄と処刑に抗議する自然な感情の発露として始まったものと考えられる。1980年代末から90年代のはじめにかけて、『東方の星』誌（ウズベク語版 *Sharq Yulduzi*, ロシア語版 *Zvezda Vostoka*）などの一般文芸誌を中心として、このような性格の論文や記事は百花繚乱のごとく誌紙面を埋めていた。グラスノスチ（公開性）により、言論統制が緩和され、アルヒーフが開放されたり、新しい雑誌などが発行されるようになった状況がこの背景にあることはいうまでもない。

一部の知識人や研究者たちはむしろこうした状況を歓迎した。しかしやがて、1991年のソ連解体とウズベキスタンの独立の後、グラスノスチの状況はやや後退し、それに呼応するかのようにやや行きすぎた歴史の見直しの傾向が見られるようになった。換言すれば、ソ連時代とは逆の意味で、歴史の見直しが一定の方向性をもつようになったのである。その方向に沿って、史実のうちであえて言及されない部分や看過される部分がやはり存在することが明らかになってきた。

例えば最も顕著な例をあげると、モンゴ

ルにおけるチンギス・ハーンの「復活」と同様に、ウズベキスタンではかつてソ連時代には概して残忍な征服者・破壊者と評価されてきたティムールが「復活」し、今や、勇猛果敢にして聡明な国家指導者として国民的英雄^{*2}の地位をゆるぎないものにしていく^{*3}。1996年にティムール生誕660年祭が国家行事として開催されたことは記憶に新しい。サマルカンドやアフラシアブのティムール朝時代の遺跡には大々的に修復工事が施され、ティムール像があらたに建設され、諸外国からの賓客を迎えて大掛かりなセレモニーが催された。ティムールとティムール朝時代についての国際学術シンポジウムも開催された。これらに伴い首都タシュケントにはティムールおよびティムール朝博物館と付設研究所が建設され、ティムール朝研究は中世史の花形となった。町中にはティムールが残したと伝えられる言葉、例えば「力は正義にあり Kuch adolatta」というようなものが大統領の言葉と並んであちこちに掲げられ、独立国家ウズベキスタンの将来的展望がそこに重ね合わされているかのようである。あたかもティムールがウズベク人であったかのような印象が広められる中、ティムール朝を滅

-
- * 2 旧ソ連中央アジアの他の国々でも「国民的英雄」的な人物を設定する試みはみられる。クルグズでは、クルグズ民族の始祖とされ、長大な英雄叙事詩の主人公として語り継がれてきたマナス *Manas* がその役割を担っており、1995年にはマナス千年祭が開催され、マナス研究は今日やはり特別な地位を占めている。カザフスタンでは、比較的新しい時代に活躍し、カザフ社会において強い影響力をもった詩人らが注目されている。最も「英雄」に近い扱いを受けているのは、アバイ *Abaj* の名で親しまれているアバイ・クナンバエフ（1845-1904）であろうか。
- * 3 例えば、1巻ものの百科事典における扱いの大きさを比べてみると、ソ連時代の百科事典『ウズベク共和国』（全1巻、555ページ）[*Uzbekskaya Sovetskaya Sotsialisticheskaya Respublika*, Tashkent: Glavnaya redaktsiya uzbekskoj sovetskoj entsiklopedii, 1981]では、ティムールについては「歴史」章の「封建主義のさらなる発展(9-15世紀)」という項で触れられているにすぎず、ティムールおよびティムール朝についての記述は1ページ半ほどである（88-89ページ）。これに対して1997年発行の『ウズベキスタン共和国百科』（全1巻、653ページ）[*Özbekiston Respublikasi: Enciklopediya*, Toşkent: Qomuslar Boş tahririyati 1997]では、ティムールに関する記述のみで7ページを占めており、ティムール朝時代全般の記述も含めると30ページを越える（113-143ページ）。

亡させた者たちこそウズベク**と呼ばれた遊牧集団であったことに注意が向けられることはほとんどない。

ティムールの再評価に先立って、アリシエル・ナヴァイー、ウルグベク、パーブル、ナクシュバンディー、ヤサヴィーといった、世界史上でも重要な意味をもつ政治家・文人・宗教的指導者たちも大々的に再評価されているが、それは、ともすれば現在のウズベキスタンの国土となっている領域に現れた歴史的人物をすべて「ウズベク人」と捉え、「ウズベク民族」の偉大さを誇るような、やや短絡的な傾向を生む危うさをもはらんでいる。

これらは政府主導のもとにいわば国策として行われているだけに、独立後の国威高揚と「ウズベク」民族意識の覚醒という目的を明確にもっているといえるのだが、それでは民族国家を形成する主体としてのウズベク人を規定しウズベキスタンという国の境界を定めた、1924年のソ連における中央アジア民族共和国の国境画定にさかのぼってその是非が検討されているかといえば、必ずしもそうではない。ソ連の民族政策によって出現した性格の強い国家としてのウズベキスタンとその形成基盤とされたウズベク人という概念について、それらが成立した経緯には十分に言及・検討されぬまま、あたかも太古の昔から厳然と存在してきたかのように、その正当性をいたずらに強調する表現が多いのが実状である。

近現代史の分野になると、問題は一層微

妙になる。この分野では、かつて「民族主義的」というマイナスのレッテルを貼られたものをプラスに評価しなおす作業がさかんである。中でも特に注目され、議論されたテーマは「民族解放運動 milliy ozodlik harakati / natsional'no-osbovoditel'noe dvizhenie」と「ジャディーディズム jadidçilik / dzhadidizm」であった。

この近現代史の見直しにおいて、「征服者・支配者としてのロシア・ソ連」対「被征服者・被支配者としてのウズベキスタン」あるいは「社会主義・共産主義の利益」対「民族の利益」という単純な図式において正負の評価を逆にし、すべてはロシアとソ連が悪かったとすることは最も簡単な対処法である。しかし、近現代史の表舞台には無数のウズベク人が登場し、中央アジアにおける革命とソヴェト体制の確立、その後のソ連国家の運営に地元出身エリートとして直接関わってきた事実を看過することはできない。全体としてのイデオロギーが価値転換を起こしたものの、これらのエリートたちにはマイナスの評価を与えることはできない——そこに矛盾が生じてしまうのである。

ある人物なり事件なりに直接関わった人々、その係累の人々が存命であり、ソ連時代にも独立後も引き続き社会的に高い地位についている場合も多く、そのような場合には特に真実の追求と公表におのずとブレーキがかかってしまう。これはどこからか圧力がかかるというよりは、いわば暗黙

* 4 キプチャク・ハーン国の君主ウズベク・ハーンの名に由来する名称と言われ、もともとはシャイバーン朝下のトルコ化したモンゴル部族の一部の名称。14世紀末から15世紀にかけてムハンマド・シャイバーニーがアラル海北方の草原地帯から侵入してブハラ、サマルカンドを攻略した。

の了解とでもいうような社会的な雰囲気が存在していると指摘してよいかもしれない。ソ連時代の悪弊をとことん追及しようとするれば現在のエリート層が根こそぎ批判されることにもなりかねないからである。

スターリンの大粛清の犠牲となったウズベクの政治家や知識人についての見直しは、学術研究の分野でもジャーナリズムの分野でもさかんである。発禁処分となった著作等が様々な形で復刻されたり、未公刊作品が発刊されたりという動きが見られる。こうした文脈でしばしばとりあげられているのは、政治家ではファイズラ・ホジャエフ Fayzulla Xōjaev (1896-1938)、作家・

詩人ではチュルパン Abduhamid Çolpon (1893-1938)、フィトラト Abdurauf Fitrat (1886-1938)、アブドゥツラ・カーディリー Abdulla Qodiriy (1894-1938)、ベフブーディー Mahmudxōja Behbudiy (1875-1919) といった人物である*⁵。

例えばこの中からファイズラ・ホジャエフを取り上げてみよう。ファイズラ・ホジャエフは、青年ブハラ人運動*⁶を出発点として政治活動に関わり、トルキスタンにおける革命とソヴェト体制の確立において中心的役割を担ったブハラ出身の政治家である。彼は弱冠29歳にしてソ連を構成する民族共和国の一つであるウズベク共和国

* 5 これらの人物を扱ったウズベキスタンの近年の文献を管見の限りで以下にまとめてあげておく。

ファイズラ・ホジャエフ関連：Alimova, D., "Istoriya ego sud'by nuzhna potomkam", *Narodnoe slovo*, 18. 05. 1996; [Alimova 1997]; Dimov, G., "Pravda tol'ko odna," *Izvestiya*, 01. 07. 1986; [Hasanov 1990]; [Naimov 1994]; Safarov, R., "Po dolgu pamyati: Fajzulla Khodzhaev," *Pravda Vostoka*, 15/17. 05. 1988

チュルパン関連：Çolpon, "Vayronalar orasidan," *Şarq Yulduzi*, No. 6, 1991; Çolpon, "Men seni unutmog uçun sevmadim," *Şarq Yulduzi*, No. 7, 1992; Çolpon, "Zamona xotini," *Şarq Yulduzi*, No. 10, 1992; Çolpon, "Mağoralar sultoni," *Şarq Yulduzi*, No. 1, 1993; Çolpon, *Asarlar* (Uç jildlik), Toşkent 1993-; Çolpon, *Adabiyot nadir*, Toşkent, 1994; Çolpon, "Kleopatra," *Pravda Vostoka*, 11. 01. 1995; Çolponniñ badiiy olami, Toşkent, 1994; Ismajlov, Kh., "In memoriam: Abdulkhamid Chulpan (1897-1938)," *Zvezda Vostoka*, No. 4, 1993; Rakhimov, T. A., "Perevodcheskoe masterstvo Chulpana" (Avtoreferat), Tashkent, 1993; Turdyev, Sh., "Sud'ba 'Utrennej zvezdy'," *Zvezda Vostoka*, No. 10, 1991; Yoldoşev, N. T., "Çolpon şe'riyatida piyzaj" (Avtoreferat), Toşkent, 1994; Şarafiddinov, O., *Çolponni anglas*, Toşkent, 1994

フィトラト関連：Fitrat, A., "Strashnyj sud," *Zvezda Vostoka*, No. 11, 1990; Fitrat, A., "Hind sayyohiniñ qissasi," *Şarq Yulduzi*, No. 8, 1991; Fitrat, *Çin seviş*, Toşkent, 1996; Boltaboev, H., "Talabni qondirmagan inqilob," *Şarq Yulduzi*, No. 1, 1991; Boltaboev, H., "Sayha' qismatidan lavhalar yoki şoir Fitrat haqida," *Şarq Yulduzi*, No. 6, 1991; Ergashev, B., "Pritcha dlya potomkov," *Pravda Vostoka*, 19. 07. 1991; Ismajlov, Kh., "Chernoje schast'e Abduraufa Fitrata," *Literaturnaya Gazeta*, 03. 04. 1991; Qosimov, B., "Fitrat," *Şarq Yulduzi*, No. 10, 1992; Ğaniev, I.; *Fitratşunoslik*, Buxoro, 1995

カーディリー関連：Qodiriy, A., *Ötkan kunlar / Mehrobdan çayon*, Toşkent, 1992; Qodiriy, A., *Toşpolod tajan nima deydi? / Kalvak maxzumniñ xotira daftaridan*, Toşkent, 1993; Qodiriy, A., Baxtsiz kuyov, "Rizaev, Ş., *Jadid Dramasi*, Toşkent, 1997; Boqiy, N., "Qatlnoma", *Şarq Yulduzi*, No. 5/6, 1991; "Qadr topgan adib," *Turkiston*, 07. 12. 1994; *Qodiriy qomsab*, Yodnoma seriyasi, No. 2, Toşkent, 1994; Qoşjonov, M., *Qodiriy — erksizlik qurboni*, Toşkent, 1992

ベフブーディー関連：Behbudiy, M., "Padarkuş yoxud Öqumagan bolaniñ holi," Rizaev, Ş., *Jadid Dramasi*, Toşkent, 1997; Aliev, A., *Mahmudxōja Behbudiy*, Toşkent, 1994; Sayyid, H., "Behbudiy qatl etgan kim?" *Özbekiston adabiyoti va san'ati*, 06. 01. 1995

* 6 19世紀末から20世紀初頭にかけて展開され、イスラーム社会の近代的改革運動ジャディーディズムを基盤にブハラ・アミール体制の変革をめざした。小松 [1996a] を参照。なお、ジャディーディズムについてはウズベキスタンの歴史の見直しの過程で数多くの文献があるがここではあえて触れない。

の人民会議議長という実質上の共和国指導者の地位に就き、中央アジアのソヴェト化に尽力したが、後に反体制的民族主義組織への加担等の汚名をきせられ粛清の犠牲となった。彼に対する名誉回復自体はスターリン批判の後1967年に行われており、1970-73年にかけて3巻から成る著作選集 [Khodzhaev 1970-73] が出版されたのを皮切りに、一定の制約の中ではあるがホジャエフの思想と活動が明らかにされるようになった。

ソ連解体前の1990年に発行された伝記 [Hasanov 1990]^{*7}においては、ペレストロイカの恩恵を受けて、その生涯のほぼ全貌が明らかにされている。そこではホジャエフは、才能と情熱にあふれた革命家、自らの自覚的活動のすべてを勤労人民と母なる祖国のために費やし、レーニンの思想に生涯を捧げた人物として描かれていたのであった。それではウズベキスタンの独立以降、「ウズベク人はかつて一度も心底から共産主義者であったことはない」と大統領が公言する社会的雰囲気の中で、ファイズラ・ホジャエフはどのように評価されるのか。単純な図式でいえば、ウズベキスタンの独立は正当、故にこれを抑圧していたソヴェト体制およびその前提となった革命は不当、となるのだから、革命とソヴェト体制の確立に尽力したホジャエフは否定的評価を受けるのか。否、現状ではそうではない。ウズベキスタンの生んだ傑出した政治家、愛国者としてホジャエフは今日その生誕100年を祝福されている。最新のホジャエフに関する研究は、彼を基本的に

ジャディードとして位置づけ、ソヴェト体制の中にあっても決してモスクワにおもねることなく民族の解放とウズベキスタンの利益の擁護に尽した存在として描いている [Alimova 1997]。こうした評価は一方ではまったく正当なものといえようが、一方でホジャエフが革命に心血を注いだこと自体は事実であり、見せかけだけではなく実際に社会主義思想にも傾倒したであろうこと、心底共産主義者として活動した側面ももっていたであろうことにはあえて触れようとしていないような印象を受けるのであるが、これは筆者のうがった見方だろうか。そしてそのような矛盾や自家撞着をも内包した複雑さを描くことこそ、中央アジア近現代史の課題ではないだろうか。

こうして、こと近現代史の見直しは多くのタブー、つまり最後まで突き詰めてはいけない部分を孕んでいるように思われるのである。そこにはあたかもウズベキスタンの社会主義時代、ソヴェト時代を歴史から抹殺するかのような作為が時として感じられる。

ひとつの国が独立し、あらゆる価値観が転換を余儀なくされる中で、独立国としての国策と進路にそって歴史研究が一定の役割を負わされるのは決して稀なことではない。ウズベキスタンでは研究者自らが進んでそのような役割を認める傾向があるが、これは国家イデオロギーに束縛されたソ連史学の重い遺産であるのかもしれない。歴史の見直しにおいて、国策からも研究者層の関心からも最も重要な位置を占めるテーマは、結局「民族」と「国家」の問題に帰

*7 この伝記については帯谷 [1993] で紹介した。

結する。それだけに、少なくとも当面は歴史の見直しが政治的制約から完全に自由であるのは非常に困難なことだろう。そして、バスマチ運動もその例外ではないのである。

2. バスマチ運動の見直し

近現代史上、「民族主義的」、「反革命的」あるいは「非進歩的」運動というレッテルを貼られていた蜂起・反乱については、ペレストロイカの開始直後から見直しが始まった。1989年にはすでにウズベキスタン科学アカデミー歴史研究所は「歴史学の現代的諸問題」というシリーズ中の『19世紀後半～20世紀初頭の中央アジアおよびカザフスタン*8における民族解放運動の歴史とその研究』[Ziyaev 1989]でその見直しの成果の一端を提示している。そこで取り上げられたのは、ロシア帝政統治下のトルキスタンで1898年に生じた、いわゆる「アンディジャン蜂起*9」をはじめ、19世紀後半のトルキスタンやカザフスタンに起こった蜂起・反乱であった。これらをめぐるソ連史学の評価は必ずしも一定せず「反動的民族主義的運動」か「反植民地的進歩的民衆運動」かをめぐって長年揺れ動いたが、ここではそれらを進歩的な「民族解放運動」という言葉で規定すべきであると確認したのであった。

ここでいう民族解放とは帝国主義的植民地支配に対する被支配民族の抵抗という意味である。この時点においてはまだ、ロシ

アによる中央アジア併合は中央アジアがロシア革命に参加するための前提として進歩的な意味をもったとの理解が支配的であり、地元民の抵抗は帝国主義的ロシア・ツァーリズムに対する抵抗である限り肯定的評価を獲得する可能性があると考えられたのである。しかしソ連解体の後、ロシア革命の絶対的正当性という大前提がなくなると、「民族解放」は階級対立を軸とする文脈を離れて、「ロシア」対「中央アジア」という文脈に収斂されるようになっていく。こうした中でにわかにバスマチ運動は注目されるようになっていった。

バスマチ運動に関する見直しもまた1980年代末に始まった。最初に登場したものとしてはキム、ハサノフ共著の論文「バスマチ運動1921-1924年」[Kim & Khasanov 1991]があげられる。ここで著者がめざしたのは、長年閉ざされてきたアルヒーフ資料に基づいてバスマチ運動の真の性格を明らかにするということであったが、バスマチ運動に対する評価自体には触れずに、当時のトルキスタンという風土において社会主義的理想を実現することがいかに困難な事業であったかを強調し、その困難の中ではソヴェト政権の中央アジア政策には間違いもあり得たであろうと指摘したのであった。

見直しという意味でより大きな反響を呼んだのは、パポロフが『ユーノスチ』誌に発表した小論「砂漠の白い太陽……」

* 8 ソ連時代の用語法として、「中央アジア」Orta Osiyo / Srednyaya Aziya とはクルグズ、ウズベク、タジク、トルクメンの4共和国を指す。現在では、カザフスタンをも含めて中央アジアと称することが多く、その場合最近の傾向として、Orta Osiyo / Srednyaya Aziya よりも Markaziy Osiyo / Tsentral'naya Aziya が頻繁に用いられている。

* 9 アンディジャン蜂起については小松 [1986] を参照。この蜂起に関する詳細なルポルタージュとして Fozilbek [1991] がある。

[Paporov 1990] である。パポロフはそれまで利用されたことのなかった1922年当時の文書史料を用いて、ソ連史学の欺瞞の一端を鮮やかに暴いてみせ、「バスマチ=悪、ソヴェト政権=善」という図式を再検討する必要性を問うた。つまり叛徒の側にも納得できるだけの抵抗の理由があったことを認めるべきであると提言したのである。まずこれをきっかけとして、従来のソ連史学におけるバスマチ運動に対する画一的な否定的評価、すなわち「帝国主義諸国に教唆された反革命的ブルジョワ民族主義的武力運動」という評価に対して疑問が投げかけられることとなったのである。

1991年『東方の星』誌に掲載された「バスマチ運動：真実と虚像」[A'zam 1991] もまた同様に、あくまで史料に基づいた史実の健全な再構築が必要であることを訴えている。ここでは歴史研究者、作家ら6名による座談会形式で議論が展開され、フェルガナ地方のバスマチ運動の指導者のひとりであったマダミンバクと赤軍との休戦に関するたいへん興味深い史料が提示されている。

また、バスマチ運動と深い関わりをもった最後のブハラ・ハーン国のアミール、サイド・アリム・ハーンについても、フランスで出版されていたメモワールがロシア語に訳されて紹介されるなど、歴史の空白を埋める作業が試みられた [Khasanov *et al.* 1991; Naimov & Egamnazarov 1992]。

こうした傾向と同時に、いわゆる西側の研究へのアクセスとそれらの積極的引用も

容易になり、バスマチ運動に関心をもつウズベキスタンの研究者たちはこぞって西側で書かれた一連の研究成果を吸収するようになった。それは、例えばヒドヤトワの博士候補学位請求論文「最近のソ連研究におけるバスマチ運動」[Khidoyatova 1993] が網羅的に西側の研究を紹介し、西側研究者との協力の必要性を強調していることに反映されている。彼女は、従来「エセ科学 *lzhenauka*」と見なされて来た西側のソ連研究が実は信頼できるものであり、バスマチ運動の真実の追求についても正しい方向を示していたとの結論に達している。

西側でのバスマチ運動研究は、ソ連のようにイデオロギーに束縛されるということではなく、様々な国の個々の研究者によって様々な立場から行われてきた。概してそれらはソ連におけるバスマチ運動に対する公式の評価を否定するもので、大別すると二つの流れがあったと言える。ひとつの流れは、帝国主義諸国、特にイギリスの教唆と支援によってバスマチ運動が広がったと強調するソ連での見方に対して、そのような援助はあったとしてもごくごくわずかなもので、バスマチ運動の拡大はあくまで革命期中央アジアの内在的な要因によるものだとするものである*10。またもうひとつの流れは、「トルキスタン民族主義」的な立場から、バスマチ運動はロシア・ソヴェトに対抗する民族運動であったと強く主張する立場からのものであった*11。

中でもウズベキスタンでしばしば紹介されたのは、ドイツ在住のバイミルザ・ハイ

*10 このような立場のものとして、Broxup, M., "The Basmachi," *Central Asian Survey* 1(1), 1983; Fraser, G., "Basmachi (I) (II)," *Central Asian Survey* 6(1/2), 1987 などがある。

ートの一連の研究であった。彼の著作の一部はロシア語やウズベク語にも翻訳されて紹介されている [Hayit 1992a; 1992b]。ハイトは中央アジア近代史を専門とする優れた歴史家だが、もともとは中央アジアの出身である。彼は、ソ連時代の中央アジアをロシア・ソ連によって独立を奪われ、従属を強いられている存在として捉えていた。このようなハイトの、トルキスタン出身の亡命研究者にありがちな、ややもすれば感情的ともいえるトルキスタン民族主義的立場は、ソ連史学を告発することに熱心となったウズベキスタンの一部の研究者たちの気分とも一致するものであったといえるだろう。

特に1991年のウズベキスタンの独立以降、独立国家の国策としても新しい「国史」を提示する必要が生じてきた。バスマチ運動についても、ソ連史学の公式見解に対する反発と新しい歴史的視点の必要から、西側の基本的評価に同調する傾向が顕著となった。科学アカデミー歴史学研究所が中心となって編纂した小中学校用の歴史教科書においてもこのような傾向は反映され、バスマチ運動は公に「トルキスタンの民族解放運動の一部」と規定されるようになった*12。こうしてバスマチ運動に対する評価は見事なまでに180度転換してしまった。今やバスマチの叛徒たちはロシアとソヴェトからの民族解放のために命をかけて戦った悲劇の英雄と捉えられ、例えばソ連時代

にはレーニン博物館であったウズベキスタン歴史博物館にはバスマチらの写真がたくさん展示されるに至っている。

独立以後のバスマチ運動の見直しにおいて顕著なのは、まず、運動に参加した者たちを極端なまでに美化して描きがちだということである。例えば、トルキスタン、特に現在のウズベキスタンの領域出身のバスマチの指導者たちに関する伝記等の中で目につくのは、フェルガナ地方のバスマチ運動指導者のひとりであったマダミンベクについてのものである [Daniyurov 1991a; Karim 1993; Karimov 1992]。筆者はソ連時代と現代のマダミンベク評価を比較検討する小論を書いたことがあるが [帯谷 1996]、そこでも述べたように、彼1人に対する評価を見ても、それはまったく逆転したとって過言でない。確かに、ソ連時代に書かれていた彼についての情報は偏ったものであり、歪曲や誇張を伴ったものであった可能性は否定できないが、現在の伝記に描かれているマダミンベクは逆にあまりに非のうちどころのない人物となっている。依拠した資料や情報の出所が必ずしも明らかにされていないので、どちらが実像に近いのか判断が難しい。これらは結局、ウズベク人の勇敢さ、高潔さ、正しさ、そしてその運命の悲劇性を強調する結果を招いている。

このように、バスマチ運動の見直しはペレストロイカ期の歴史の空白を埋めようと

* 11 後述のハイトの著作の他に、このような立場の代表的な研究書としては、Marwat, F. K., *The Basmachi Movement in Soviet Central Asia—A Study in Political Development*, Peshawar, 1985 があげられる。

* 12 例えば1994年刊の9年生用教科書『ウズベキスタン史』。[*Özbekiston tarixi (1917-1993)*, Toshkent: Oqituvchi 1994]

する健全な努力に始まりながらも、その後のソ連解体を経て、ソ連時代と逆の政治的色彩を帯びるに至った。最も注意を向けるべきことは、バスマチ運動研究がウズベキスタンの独立という事実の正当性を絶対的なものとする見地に拠って立つがゆえに、バスマチ運動の目標と独立国家ウズベキスタンの存在とが無条件に重ね合わされている点である。例えば、バスマチ運動研究の若手第一人者ラジャボフは次のように述べている。「1918～1930年代半ばのフェルガナ盆地における独立運動 [筆者註: バスマチ運動のこと] はたいへん興味深いものであり、その参加者たちのヒロイズム、祖国に対する鋭敏な感情、愛国心、自民族の運命に対する責任感、その時代の人々と次世代の人々の心に自由と独立の意志ある息吹を吹き込み、そのことがウズベキスタン共和国の独立獲得の確固たる基礎となったのだ」 [Rajabov 1995: 3]。

しかし、バスマチの叛徒たちが具体的に何を求め、何を目標としたのか、これは運動の舞台となった複数の地域と数多くのグループごとに慎重に検討しなければならない複雑な問題である。仮に、彼らの目標がトルキスタンの解放、あるいはトルキスタンの自治獲得であったというとしても、彼らの主張したトルキスタンという地域と概念を現在のウズベキスタンに一致させて捉えることは果たして妥当なのだろうか、彼らが主張したはずのトルキスタン人という

概念はどう位置づけられるのだろうか。トルキスタンとウズベキスタンの関係はここでもまた突き詰められぬ問題として残されているのである。あるいはフェルガナで運動を展開したのはいわゆるウズベク人だけではなかったはずだが、彼の表現から見る限りウズベク人以外は念頭にないかのようなのである。しかも当時の運動参加者の自己意識としてはトルキスタン人またはフェルガナ人という意識のほうがより強力ではなかったのだろうか。

II. バスマチ運動に対する新たな評価と新たな名称をめぐって

ラジャボフは1995年その博士候補学位請求論文において、バスマチを「イスティクラルチ (独立主義者) *istiqlolçi*」と呼びかえ、バスマチ運動という呼称をまったく用いずにこれを「イスティクラルチク運動 *Istiqlolçilik harakati*」と称し、「独立^{*13}を求める運動」との説明を付している。この名称を採用したことについて、筆者が入手している上述論文の要旨「フェルガナ盆地におけるイスティクラルチク運動: その本質と基本的発展段階 (1918-1924年)」 [Rajabov 1995]^{*14}においてはラジャボフは特に説明をしていない。

もともと「バスマチ」とは叛徒たちの自称ではなく、その由来は、帝政ロシアのトルキスタン行政官たちがたびたび襲撃行動を起こした地元住民たちに対して使った

*13 同じく「独立」と訳せるが、現在のウズベキスタン共和国の独立について言う場合は通常 *mustaqillik* という言葉を用いる。

*14 筆者も修士論文において、主にトルコで出版されたある運動指導者の回顧録を利用し、フェルガナ地方におけるバスマチ運動の展開を扱った。その成果の一部としては帯谷 [1992] を参照されたい。ラジャボフは主にウズベキスタンのアルヒーフ史料に依拠しているが、運動の展開の事実関係についての記述は、筆者の見解とおおむね一致している。

「襲撃者・強奪者」という悪い意味の言葉であり、それが後に1916年以降の反ソヴェト運動を総称する名称として使われるようになったというものである。運動に対する評価がマイナスからプラスに転じた以上、「バスマチ」という不名誉な名称は返上し、積極的な意味合いの名称を付すべきであるというのが彼の見解であろうと推察する。そしてこの主張と新しい名称はウズベキスタンの歴史学会において極めて好意的に受け入れられ、支持されているのである。

ウズベキスタンの研究者の一部にやや以前から「バスマチ」という名称への一種の嫌悪感があったのは事実である。筆者自身も1993年にウズベキスタンを訪問した際、複数の研究者たちからそのような意見を耳にした。その時には彼らは「蜂起者たちの運動」(ロシア語で *povstanchesкое движение*) という呼称が適切であるとしており、これについてはヒドヤトワもこの呼称を採用する必要性を検討すべきと言及している [Khidoyatova 1993: 20]。その後、管見の限りではこの「蜂起者たちの運動」という呼称は文献等に目立って登場したということではなく、タームとしてはあまり定着しなかったようである。「蜂起者」よりは「独立主義者」のほうがより積極的で政治的な響きをもっていることは理解できるところであり、またラジャボフはバスマチの叛徒たちがフェルガナ地方において「フェルガナ臨時自治政府 *Farg'ona muvaqqat muxtoriyat hukumati*」, 「トルキスタン・テュルク独立イスラーム共和国 *Turkiston-turk mustaqil islom jumhuriyati*」というような政府の樹立を試みたことを史料的にも跡付け、高く評価してい

る [Rajabov 1995: 23-24] ことから、単に蜂起行動を起こすのみならず、バスマチの叛徒たちはソヴェト政権とは別の政府をたてること、すなわち「独立」を志向したことを強調しているのであろう。現在ではラジャボフ命名による呼称のほうが広範な支持を獲得するに至っている。

いずれの名称を用いるにせよ、バスマチ運動の基本的性格を「民族解放運動」とする点では一致しており、これはまた現在のウズベキスタンの歴史学会における公の評価でもある。ラジャボフは歴史の見直しの過程でクローズアップされてきた民族解放運動を賛美する立場を踏襲するとともに、さらに積極的な意味付けをしたのである。彼の研究の内容自体は、これまでのソ連側・西側の研究蓄積を十分咀嚼した上で、ウズベキスタンの中央・地方アルヒーフ史料を駆使した抜きさで内容の濃いものであり、高く評価されうるものだという点には筆者も異存はない。しかし、「イスティクラルチリク運動の真実を復元し、この運動の名誉ある参加者たちの名を現代の人々の記憶の中に蘇らせ、ウズベキスタン共和国の独立と主権を強化するために彼らの英雄的行為の教育的作用を強めることが必要であり、このことによってこの運動の歴史を学術的に研究する要請が現実のものとなった。現代的諸条件のもとでこれを多角的かつ深く研究すれば、特段の政治的実践的意味が得られるのである」 [Rajabov 1995: 4] と力説する彼の立場には、筆者は違和感を感じるとともに、ある種の危うさが潜んでいるように思えてならない。つまり、バスマチに対するイメージが再び、体制の要請に適合するように脚色されて、

実像から乖離していってしまう可能性はないだろうか、脚色されないまでも、英雄的行為にふさわしい部分のみがいたずらに強調される結果に陥らないだろうか。そうなれば、評価の正負は逆でも、歴史研究に対する姿勢そのものは結局彼らの批判するところとなったソ連史学と同じになってしまうのではないか。

筆者自身は現時点ではバスマチ運動を別の名称に置き換える必要がぜひともあるとは考えていない*15。「バスマチ」という言葉がロシア革命を経てやがて意味の変質を起こし、叛徒たちにとっても「ムジャーヒド」と同義になっていった、という同時代の観察者たちの指摘もある [Chokaev 1928: 273; コラズ 1956: 340]。また、一つにはバスマチ運動という呼称はすでに固有名詞として広く定着しており、別の名称で呼ぶとしても、ウズベキスタン以外では中央アジアの他の国においてさえ、カックつきで「いわゆるバスマチ運動」と説明せずには理解されないという便宜上の問題があり、またより重要なことには、例えば「独立運動」などのような名称を与えることによっておのずと運動に対する評価とアプローチのしかたが規定されてしまい、かえってこの運動において見られた様々な要素、その時代と風土を反映していたはずの極めて興味深い諸現象のうちの相当部分を見過ごしてしまうことを筆者は危惧するのである。

III. バスマチ運動を民族独立運動としてのみ捉えることは妥当か？

筆者自身もバスマチ運動に対する関心を抱いた当初、これをもっぱら中央アジア住民による民族独立運動とする立場をとった。それは当時のソ連側の文献にみられた、極めて教条的で画一的なバスマチ運動評価に対する反発でもあったかもしれない。しかし、その後検討と考察を重ねるにつれて、この運動を最初から民族独立運動と規定して捉えることに疑問を感じるようになった。もちろん運動の中にそのような要素があったこと、しかもそれが主たる要素であったことは否定しないし、それについては十分に検討してみなければならない。しかし、先にも触れたように、あらかじめこの運動に何らかの定義をしてかかることはこの地域の理解のために重要な諸要素の看過につながるだろう。特に、ここに「民族」の「解放」や「独立」という枠を設定し、その「民族」の概念を突き詰めようとするれば、記述する者の後知恵が反映されてしまう。かえって民族独立運動という枠をはずしてかかったほうがはるかに豊かにこの運動とその背景にある時代と地域とを描くことができるのではないだろうか。

再びラジャボフを引用すれば、「フェルガナ臨時自治政府もトルキスタン・テュルク独立イスラーム共和国も、民族共和国の形成という理念を体現したものであった」 [Rajabov 1995: 30]。ここで彼は何を

*15 完全に呼びかえるという意味ではなく、別の呼び方をするとすれば、フェルガナにおいて叛徒たちの自称であったといわれる「コルバシユ qorboši」(軍司令官の意)を用いて「コルバシユたちの運動」とするのが最も適切だろう。

「民族」と捉えているのだろうか。トルキスタンだろうか、テュルクだろうか、ムスリムだろうか。それらが当時のトルキスタンの人々のアイデンティティと呼べるものであったとしても、今日的な意味でいうところの民族国家の主体になるべき存在として考えられていたと即断することはできないだろう。運動が展開された時点において「民族」という名を与えられる対象の実体は、叛徒たち自身にとってさえきわめて曖昧なものだった。中央アジアは、民族的自己規定あるいは集団的アイデンティティの問題が地元出身の知識人たちの意識によるやくのぼったところで革命を迎えたのであり、トルキスタン・アイデンティティと呼べるものの萌芽が現れたところであった[小松 1996b: 95-96]。そしてロシアの支配からの解放をめざすとしても、それをどのような形で実現させるべきかについて知識人たちの間には様々な立場があり、決して完全独立を求めて一致団結していたわけではなかった。

バスマチ運動が顕在化する契機ともなったのは、ロシア革命の勃発からほどなくして現地の改革派・保守派が協力してコーカンドで樹立を宣言した「トルキスタン自治政府 Turkiston muxtoriyati / Turkestanskaya avtonomiya」(通称「コーカンド自治政府 Qōqon muxtoriyati / Kokandskaya avtonomiya」)^{*16}が反革命と規定されたため、赤軍によって一方的に壊滅させられ、一般市民にも虐殺が及んだという事件だった。このコーカンド自治体はボリ

シェヴィキのアピール「ロシアの諸民族の権利宣言」(1917年11月15日)、「ロシアおよび東方の全ムスリム勤労者へ」(1917年12月3日)に呼応して設立されたのであり、彼らがそこで求めたものとは、ロシア民主連邦共和国内での自治の確立であった[Khasanov 1991: 159-162]。やがてこの「トルキスタン」という枠組みはソヴェト体制内においていったんは自治国家として実現され、1918年トルキスタン自治ソヴェト共和国が成立するが、その存続はわずか6年であった。1924年に行われた民族共和国別境界画定こそ今日の中央アジアの国々の基本的な領域とアイデンティティを設定したものだ。

また、フェルガナ地方のバスマチ運動についていえば、ラジャボフの指摘の通り「政府」や「共和国」という名称のついた政権が樹立されたとはいえ、そこには運動自体がジハードとして位置づけられ、イスラーム政権の樹立あるいは復活という側面があったことも見過ごしてはならない[帯谷 1992: 17-20]。叛徒たちは「イスラーム軍総司令官 Amirul-muslimin (原義は信徒の指揮官)」を頂点とする軍事組織をもって戦った。最も有力な指導者のひとりであり、その父親がコーカンド・ハーン国の軍人であったというシルムハンマドベク Şermuhammadbek は、「トルキスタンはトルキスタン人のために」というスローガンをかかげながら、少なくとも初期段階においてはこの運動を、ロシア帝国によって征服されたコーカンド・ハーン国の再生と

*16 トルキスタン自治政府もまた歴史の見直しの重要なテーマになっている。見直しの最も初期のものとしては Khasanov [1991] を参照。

フェルガナにおけるイスラーム政権の復活のための戦いと認識していた。

同様に、ソヴェト政権によって玉座から追われバスマチ運動に身を投じたブハラ・アミールも自らの復権をかけてこれをジハードと宣言していた。ジャディードたちはこのアミールと彼の行って来た専制的圧政を嫌悪し、その変革をめざしたのであったが、一方バスマチ運動において観察されるように、このアミールの権威を盲目的に信奉する人々の存在もまた当時の中央アジア社会の現実であっただろう。このような問題に目を向けるなら、19世紀末から20世紀初頭にかけて、この地域におけるイスラームの存在とその発現のしかたを問うことになるだろう。

反ロシアあるいは反ソヴェトという意味では結束しえた運動参加者の様々なグループは必ずしも常に一枚岩的に団結していたわけではない。グループ間の争いもしばしばあった。例えばフェルガナにおいて見られた定住ウズベクと半遊牧クルグズの対立関係と連合関係などは、トルキスタンの民族独立運動という見地からは注目されそうもない問題だが、それもまたフェルガナ地方の地域社会の実状の反映であったはずである。ペレストロイカ期に同じ地域でウズベク人とクルグズ人の衝突事件^{*17}が起こったことを想起すればきわめて現代的意味をもってくる問題でもある。

バスマチ運動は、アクサカルと呼ばれる村の長、部族の長、スーフィー教団の指導者など各地の有力者・指導者たちが地縁・血縁でつながる者たちを率いて同時発生的

かつ自然発生的に蜂起行動を起こしたものである。そこにさらに様々な理由と経緯からソヴェト政権と袂をわかった人々が流れ込んできた。そうした者たちの中には、ブハラ・ハーン国のアミールのような元専制君主もいれば、その打倒を望んだ改革主義者のジャディードたちもおり、さらにはバシキール人の民族運動指導者で後にトルコに亡命し歴史学者となったアフメド・ゼキ・ヴェリディ・トガン Ahmed Zeki Velidi Togan やオスマン朝の元陸軍大臣でバスマチ運動の中で命を落としたトルコ人エンヴェル・パシャ Enver Paşa といった、トルキスタン出身でない、外来の指導者たちの姿も見られた。まさにそのようなまとまるとは思えぬ人々が結集した総体がバスマチ運動として現れたのであり、その無摂理にも見えるダイナミズムを解明することがバスマチ運動研究の課題であるといえるだろう。

従って、バスマチ運動に対して民族独立運動という定義を前提としてアプローチするのはあまり生産的ではない。特に、すでに触れたように、トルキスタンという概念のもとに設定される民族はその内実が必ずしもはっきりしておらず、ある意味でトルキスタンの表す領域は伸縮自在でもあり、そこには中央アジアのあらゆる異質な人々が含まれうることを忘れてはならない。「トルキスタン」の旗印のもとに集まった人々が実際にはどのような背景や出自をもつのかを検討することなく、その統一性のみを強調することは慎重さを欠く試みである。それよりは、筆者自身は、我々外国人

*17 1990年にクルグズのオシュで生じたもの。

にもアクセスが容易になった中央アジアやロシアのアルヒーフ史料、さらに運動参加者の亡命先などに存在する様々な形態の資料の突き合わせと、運動に関与した人々への聞き取り調査を組み合わせることによって、バスマチ運動の歴史の再構築を試みつつ、その背景にあった19世紀末～20世紀初頭の中央アジアの社会的風土を描いてみたいと考えるのである。

IV. 展望——むすびにかえて

それではこのような立場からバスマチ運動研究を行うことによってどのような成果が期待できるだろうか。

バスマチ運動は、第一次世界大戦、ロシア革命、そしてそれに続く内戦という複雑な時代を背景としており、中央アジアにおける革命の混乱と矛盾の縮図といった様相を呈している。そこから掘り起こされるであろう問題はきわめて多岐にわたるはずである。その中で、筆者は現時点で以下の2点を念頭に置いている。

まず第一に、バスマチ運動研究を通じて中央アジアにおける革命期の歴史の一部を再構築することが可能であろう。この分野には明らかになっていない部分、語られていない部分が多岐に多い。一例をあげるなら、バスマチ運動参加者とジャディードたちの関係の問題である。バスマチとの共謀というのは中央アジアの大粛清においてまず第一にあげられた罪状であり、「無実の罪」をきせられた人々が多かったのは事実である。しかし革命後ソヴェト政権内部にすでに地歩を固めていたジャディードたちの中には密かにバスマチと連絡を取って

いた者があったのもまた事実である。ブハラ人民共和国の初代大統領オスマン・ホジャエフ *Ösman Xöjaev* が大統領就任後間もなくバスマチの側に転じたことはすでによく知られている。さらにトガンやエンヴェルらも関わって、水面下では実に複雑な関係が築かれていたが、この実態はまだ必ずしも明らかでない。そして、一見整合性がないかに見えるこうした行動は、当時の地元出身エリートたちの苦悩と、革命とソヴェト体制の矛盾を反映したものであったはずである。

第二に、バスマチ運動の主たる舞台となったフェルガナ、ブハラ、東ブハラ、ヒヴァの4つの地域を比較検討することによって、当時の中央アジアにおける地域の特徴、地域差の抽出が可能となるのではないかと。中央アジアは文化的一体性をもちながらも、その内部は多様な世界である。その中には、必ずしも現在の国境線の制約を受けない、いくつかの文化圏、生活圏、地域単位が存在したであろう。バスマチの叛徒たちのグループ形成の状況や、移動経路、対立と連合の関係などによってそれらのある程度把握することができるのではないだろうか。例えば、現在のウズベキスタン領ブハラから東ブハラの山岳地帯へ、そして更に東進して現タジキスタン領ドゥシャンベを通過してアフガニスタンへ、というのはバスマチの叛徒たちが逃走経路として頻りに利用したルートであるが、タジキスタンの内戦を念頭におけば現在でもこのルートは生きることがわかる。こうした中央アジア内部の地域単位を考える視点は中央アジア地域研究にとっても意味をもつであろう。

参考文献

- ペレストロイカ期以降のバスマチ運動を扱った文献については本文中に引用しなかったものもここにあげておく。また、バスマチ運動についての文献には*を付した。
- Abdullaev, R.
1993 *Turkestan mezhdv dvukh revolyutsij Tsentral'no-aziatskoe obozrenie* Vyp. 1: 26-37
Alimova, D. A. red.
1996 *Turkiston mustaqilligi va birligi uchun kurash sahifalaridan* Toşkent: Fan
1997 *Fayzulla Xojaev hayoti va faoliyati haqida yangi mulohazalar* Toşkent: Fan
A'zam, M., Germanov, V., Haidarov, A., Hasanov, M., Karimov, Ş. & Mahmudov, Q.
*1991 Bosmaçilik: haqiqat va uydirma *Şarq Yulduzi* No. 3: 165-189
Chokaev, M.
*1928 The Basmaji movement in Turkistan *Asiatic Review* 24 (78): 273-288
Daniyorov, Ş.
*1991a Madaminbek kim edi? *Yoşlik* No. 4
1991b Muxtoriyat qismati *Şarq Yulduzi* No. 12: 159-173
Fozilbek
1991 Dukci Eşon voqeasi *Şarq Yulduzi* No. 1: 146-179
Hasanov, M.
1990 *Fayzulla Xojaev* Toşkent: Özbekiston
Hayit, B.
*1992a *Basmatschi: Nationaler Kampf Turkestans in den Jahren 1917 bis 1934* Koln: Dreisam Verlag
*1992b Basmacheskoe dvizhenie *Zvezda Vostoka* No. 1 (Original: 1956 *Turkistan in XX jahrhundert*, Darmstadt)
1992c Sovetlar ittifoqida turklikniñ va islomniñ ba'zi masalalari: XX asrda Turkistondagi milliy va sovet davlatlariniñ harakteri *Şarq Yulduzi* No. 3: 141-156
Ibodinov, A.
*1993 *Qorboşi Madaminbek (Huyyatli qissa)* Toşkent: Yozuvçi
Ivanchin, V., Khasanov, M.
*1993 Fergana v 1918-1919 godakh *Tsentral'no-aziatskoe obozrenie* Vyp. 1: 7-25
Karim(ov), I.
*1992 Armonda qolgan Madaminbek *Şarq Yulduzi* No. 7: 144-150
*1993 *Madaminbek (Ijtimoviy-falsafiy oçerke)* Toşkent: Yozuvçi
Kim, P. & Khasanov, M.
*1989 Basmachestvo: 1921-1924 gody *Zvezda Vostoka* No. 6: 141-150
Khasanov, M. K.
1991 'Kokandskaya avtonomiya' i nekotorye ee uroki in Radzhapova R. Ya. red. *Oktyabr'skaya revolyutsiya v Srednej Azii i Kazakhstane: Teoriya, problemy, perspektivy izucheniya* Tashkent: Fan
Khasanov, M., Germanov, V., Shadiev, K.
1991 Said Alimkhan. Bukharskij emirat: navstrechu gibeli *Şarq Yolduzi* No. 7: 44-62
Khidoyatova, N. G.
*1993 Basmacheskoe dvizhenie v sovremennoj sovetologii (Avtoreferat dissertatsii na soiskanie uchenoj stepeni kandidata istoricheskikh nauk) Institut istorii AN Respubliki Uzbekistan
- 小松久男
1986 「アンディジャン蜂起とイシャーン」『東洋史研究』44(4): 589-619
1996a 『中東イスラム世界7 革命の中央アジア——あるジャディードの肖像』東京大学出版会
コラーズ 小野武雄訳
1956 『ソヴェート民族史』国際文化研究所
1996b 「トルキスタン人の生成とその行方」『歴史学研究』690: 93-100
Naimov, N.

- 1994 *Men yaşaşni istayman* Buxoro : Buxoro
 Naimov, N. & Egamnazarov, A.
 1992 Amirniñ avloglari *Şarq Yuduzi* No. 3: 167-183
 Norzhigitova, N. A.
 * 1995 Istoriografiya 'basmacheskogo dvizheniya' v Turkestane (Sovetskij period) (Avtoreferat dissertatsii na soiskanie uchenoj stepeni kandidata istoricheskikh nauk) Institut istorii AN Respubliki Uzbekistan
- 帯谷知可
 1992 「フェルガナにおけるバスマチ運動 1916-1924年——シル・ムハンメド・ベクを中心とした『コルバシュ』たちの反乱——」『ロシア史研究』51: 15-30
 1993 「マジド・ハサノフ著『ファイズラ・ホジャエフ』」『東洋学報』75(1・2): 175-180
 1995 「中央アジアにおけるスーフィズム——バスマチ運動とタリーカ」原暉之編『講座スラブの世界2 スラブの民族』弘文堂
 1996 「ウズベキスタンにおける歴史の見直しの一断面——英雄になったマダミンベク」『民博通信』74: 99-105
- Paporov, Yu.
 * 1990 Beloe solntse pustini?.. *Yunost'* No. 1: 80-85
- Qahhor, T.
 1994 *Hur Turkiston uchun* Toşkent: Çölpon
- Rajabov, Q. K. (Radzhabov, K. K.)
 * 1995 “Istiqlolçilik Harakati v ferganskoj doline: Sushchnost' i osnovnye etapy razvitiya (1918-1924 gg.)” (Avtoreferat dissertatsii na soiskanie uchenoj stepeni kandidata istoricheskikh nauk) Institut istorii AN Respubliki Uzbekistan
 * 1996 Farğona vodiysidagi istiqloçilik harakati yolboşçilari (1918 yil fevral'-avgust) *Turkiston mustaqilligi va birligi uchun kurash sahifalaridan* in Alimova, D. A. red. Toşkent: Fan
 * 1997 Fayzulla Xõjaev va milliy istiqloç harakati [Alimova 1997]
- Şamsudinov, R.
 * 1993 Bosmaçilik haqida õylar *Muloqot* 5/6: 26-32; 7/8: 30-35
- Ziyaev, Kh. Z. red.
 1989 *Istoriya i istoriografiya natsional'no-osvoboditel'nykh dvizhenij vtoroj poloviny XIX-nachala XX v. v Srednej Azii i Kazakhstane: Itogi, poiski, perspektivy izucheniya* Tashkent: Fan